

三月十四日(月)

〈文学部 文学科〉

平成二十八年年度 金沢学院大学 入学試験問題（一般入試Ⅲ期）

国 語

（注意事項）

解答用紙に「国語」と記入・マークしてから解答してください。

問題は1ページから14ページまであります。

問題は持ち帰ってもよいですが、コピーして配布・使用するのには法律で禁じられています。

（解答上の注意）

解答は、解答用紙の解答欄にマークしてください。例えば、

10

と表示のある問いに対して

④と解答する時は、下記の（例）のように解答番号10の解答欄の④にマークしてください。

（例）

解答番号	解 答 欄
10	① ② ③ ● ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

問題は次のページからです。

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1〜7)に答えよ。

「已然」と「未然」。いささか古風なこのことばの日本的なひびきに心をひかれます。なぜなら(ア)その発想法が、日本語の「時」の把握をいみじくも表しているように思われるからです。時を二分し、「已に然り」と「未だ然らず」に区分するという発想は、近代文法の「過去」と「非過去」に通じるものがあります。しかも非常に①ホウカツテキで、「已然」という語は「完了」的な意味合いと「(性)を、「未然」という語は「否定」的な意味合いと「(性)をも含んでいます。わたくしは、現代の日本語にももの考え方の中に、いぜんとしてこの二分法が生きていると思います。過去・現在・未来という三分法では、どうしても説明しきれないものがあるのです。おそらくこれは、「話し手」自身を基準にしてものを見ていくという日本語の性格に基づくものでしょう。ことばの仕組みをつきつめていくと、そのいちばん奥に、「それは自分自身にとって已に然りであるか(もう現実となったか)、あるいは未だ然らずか(まだ現実となっていないか)」と問う姿勢があります。この二分法を基礎にさまざまな変化が生まれ、多様な「時」の表現が分化してきたものと思われれます。

人間はみな、自分自身の「時」を持っています。そしてたしかなことは、「自分が現在ここに居る」ということです。「時」の流れを鉄道にたとえれば、わたくしは現在という名の列車に乗っているのであり、つねに現在の中にいます。人生のさまざまな出来事が、車窓の外と内とで、現在という「時」を共有する体験となります。

そこには、二通りのかかわり方があるわけです。一つは車外、一つは車内。そのいちばん大きな違いは、接する時間の長さです。「車外」の風物に接する時間はごく短く、つきつめていけば瞬間にすぎません。車外の風景は一瞬のうちにはわたくしの前を過ぎ去ります。つまり、「わたくしの現在」とかかわるのは、瞬間というゼロの接点においてだけです。これに対して、「車内」の場合には十分な長さをもってわたくしの現在に接しています。ですから「わたくし」と「ものごと」とのかかわり方がいつも後者(車内)のようであるとしたら、過去・現在・未来の三分法で十分に説明がつくでしょう。「現在」が実質的な長さをもち得るのですから。しかし現実には、前者(車外)のような場合が数多くあります。この場合、三分法をとると、②現在という時間をゼロとして扱う必要が出てきます。結局、現在というものがなくなつて、過去と未来の二つが残ります。言いかえれば、「現実に起こったこと」と、「まだ起こらないこと」との二つ——「已然」と「未然」とになるわけです。

この場合、後者のようなかかわり方の「現在」は「すでに然り」であり、「已然」の仲間になります。このグループの動詞は少数で、存在をあらわす「ある」「いる」、感覚や心のはたらきをあらわす「感じる」「見える」「思う」などです。この仲間は、終止形のまま、現在の事実をあらわすことができます。

それと②ダイシヨウウテキなことばに、「死ぬ」という動詞があります。「生」から「死」へ徐々に近づいてはいきますが、いかに死期が迫っても「生」は「生」です。最期の一瞬まで「生きて」います。つまり、この時点ではまだ「死ぬ」という出来事は起こっていません。そして、ついに「死の一瞬」が来ます。しかし、わたくしたちがまくらべて看取っているとしても、その人の「死」を実際に知るのは、その瞬間が訪れた後です。時間を止めない限り、瞬間はとらえられません。現実の時は流れ続けていますから、死の瞬間は、「死んだ」という過去の形でしかとらえられないのです。そこで、「死」に関しては、「まだ死なない」という未然の状態と、「もう死んだ」という已然の状態とが把握できるだけです。「死んでいる」という言い方もありますが、これも③已然タイです。

このように、具体的な出来事としての「死」は、いわゆる動詞の原形ではあられない性格を持っています。「死ぬ」という動詞自体は、「④カンネン」を示すにすぎません。日本語の動詞にはこういう性質のものが多くあります。(一) Ⅲ (二) など、日常なにげなく使っていることばが、「死ぬ」と同じような性格をもっています。

日本語の文法には、「現在形」という用語が見当たりません。「持つ」「住む」「困る」「高い」「寒い」など、活用語のいわゆる原形は、単に「終止形」と呼ばれています。これは日本語に「現在」をあらわす手立てがないということではなく、現在のあらわし方が⑤イチヨウでないためだと思えます。「死ぬ」のように、どんな組み合わせ方をしても現在があらわせない語、「ある」のようにその一語で現在をあらわす語、「生きる」のように「て+いる」の力をかりてはじめて現在の実情があらわされる語など。どうも⑥日本語の「現在」というのは、実体はあるが、つかみどころのないことばなのかもしれません。

日本語は、語形変化のない言語や、原形と現在形とが一致する言語の場合とは、かなり事情がちがうわけです。原形とも言うべき「終止形」が、かならずしも「現在」をあらわすとは限らないのですから。たとえば「食べる」という終止形は、一見すると現在形のようにも見えます。しかしそれは一般論・抽象論の場合です。内容が個別的・具体的になると、「未来」をあらわすようになります。

「人はだれでも野菜を食べる。」
「ぼくは今この野菜を食べる。」

前の例は一般論で、現在形と言ってもいいでしょう。しかし後の例を現在形とはいえないと思います。「今」と言っても、現在はまだ野菜を食べてはいないのですから。「すぐあとで食べる」ときめただけです。(一) Ⅳ (二) なのです。

入門期の日本語教室で、よくこの種の行きがちがいが起こります。教師の方は一般論として質問しているつもりでも、学生の返事は目前の光景に引かれて個別的になり、「時」が合わなくなります。

問「わたくしたちは目でどんなことをしますか。」

答「わたくしたちは目でこの部屋の黒板を見ます。」

質問者の方は、「わたくしたち」は不特定多数のわれわれ人間で、自分も含めて、人間の目にはどんな働きがあるかを聞いたつもりでした。ですから、単純に「見ます。」と答えればよかったです。しかし、外国人の方は、もっと限定的な、現在教室にいる「わたくしたち」という意味にとっ
てしまいました。つまり正しい文型になおせば――

答「わたくしたちは目でこの部屋の黒板を見ています。」

ということになります。しかし、これでは質問に対してトンチンカンな返事です。この場合に、^(E)学習者は「見ます」と「見ています」の区別も、「見ます」の二通りの用法の区別も、ついていなかったことになります。「この」とか「黒板」とか個別的要素の強いことばを加えたために、「見ます」の意味が「見る予定」をあらわすことになってしまったのでした。

(山下秀雄『日本のことばとことば』による)

問1 傍線部ア「その発想法が、日本語の「時」の把握をいみじくも表している」とあるが、どういふことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 1。

- ① 「已然」と「未然」という古めかしく雰囲気のあることばが、日本語の「時」を考える上で都合がいいということ。
- ② 「已然」と「未然」という古いことばの日本的なひびきが、日本語の「時」の特徴を如実に現しているということ。
- ③ 「已然」と「未然」という二分割が、日本語における「時」の考え方を、非常に適切に表現しているということ。
- ④ 「已然」と「未然」という二分割が、日本語の「時」の考え方を、図らずも言いあててしまっているということ。
- ⑤ 「已然」と「未然」に「時」を分割するやり方が、現代の日本語のものの考え方の基本に通じているということ。

問2 空欄(Ⅰ)(Ⅱ)(Ⅲ)にはそれぞれ本文中の語が入る。その組み合わせとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 2。

- ① (Ⅰ) 過去 (Ⅱ) 未来 (Ⅲ) 未来
- ② (Ⅰ) 過去 (Ⅱ) 未来 (Ⅲ) 已然
- ③ (Ⅰ) 基礎 (Ⅱ) 分化 (Ⅲ) 未然
- ④ (Ⅰ) 抽象 (Ⅱ) 具体 (Ⅲ) 已然
- ⑤ (Ⅰ) 具体 (Ⅱ) 抽象 (Ⅲ) 未然

問3 傍線部「」は現在という時間をゼロとして扱う必要が出てきます」とあるが、どういふことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 3。

- ① 「現在」が一瞬しかないため、算定することができないということ。
- ② 「現在」が一瞬しかないため、算定を諦めるしかないということ。
- ③ 「現在」が実質的な時間を持ち得ないため、「現在」を思考の対象から外すということ。
- ④ 「現在」が実質的な時間を持ち得ないため、ないものと考えられないということ。
- ⑤ 「現在」が過去と未来から区別できず、ないとみなすしか方法がないということ。

問4 空欄(Ⅲ)にはいくつかの語が入るが、ここに入らないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 4。

- ① 「聞こえる」
- ② 「分かる」
- ③ 「届く」
- ④ 「終わる」
- ⑤ 「来る」

問5 傍線部ウ)「日本語の「現在」というのは、実体はあるが、つかみどころのないことばなのかもしれません」とあるが、どういふことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 5。

- ① 日本語の文法に「現在形」という用語がないほど、日本語における「現在」は、知的な理解を超える性質を持つているということ。
- ② 「現在形」を、敢えて「終止形」と言い替えるなくてはならないほど、日本語における「現在」は、本質が見極めにくいということ。
- ③ 日本語で「現在」をあらわそうとすると、複雑になり、それが不可能な語もあるなど、日本語の「現在」の性質は捉えにくいこと。
- ④ 日本語の「現在」にはさまざまなあらわし方があり、正確に言いあらわそうとすると困難で、言葉を選ぶことが難しくなるということ。
- ⑤ 自分自身の「時」を日本語で言いあらわそうとすると、幾通りもの表現が可能になり、要所を押さえることが困難だということ。

問6 傍線部エ)「学習者は「見ます」と「見えています」の区別も、「見ます」の二通りの用法の区別も、ついでに「見ませんでした」とあるが、ここで述べている趣旨に合致するものには①を、合致しないものには②をマークせよ。

解答番号は A 6、B 7、C 8、D 9、E 10、F 11。

- A 学習者は、質問の一般論的な意味合いを捉えられず、自分に引きつけて個別的に理解してしまった。
- B 学習者は、質問者の一般論的な意図をはき違え、自分にとって都合のよい解釈を選んでしまった。
- C 学習者は、自分の返事がトンチンカンであるかもしれない可能性に、うすうすは気づいている。
- D 学習者は、自分の言いたいことを、正しい文型で言いあらわすことができなかった。
- E 教師と学習者の間で生じたこのような理解と表現のずれは、日本語の入門期に特有の事態である。
- F 教師は学習者に、日本語特有の発想法を、個別例に即して丁寧に教えることが求められている。

問7 傍線部①～⑤のカタカナ部分に当たる漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

解答番号は 12 ～ 16。

① ホウカツテキ 12

- ① 本質をカツパする。
- ② 平和をカツボウする。
- ③ 紙数が尽きたのでカツアイする。
- ④ 組織のジュンカツユとなる人。
- ⑤ 会話をカツコでくくる。

② タイシヨウテキ 13

- ① 鮮やかなザンシヨウに見入る。
- ② それはシヨウビの問題だ。
- ③ シヨウブの気風がある学校。
- ④ シヨウチュウの珠のような存在。
- ⑤ シュシヨウな心がけを示す。

③ 已然タイ 14

- ① タイボウ生活を続ける。
- ② タイコの生物に興味がある。
- ③ タイゼンと構えて動じない人。
- ④ 場所柄にふさわしいタイド。
- ⑤ ケンタイカンに悩まされる。

④ カンネン 15

- ① 亡父のネンキを営む。
- ② ネンエキシツの男。
- ③ 余暇をネンシユツする。
- ④ 情熱がサイネンする。
- ⑤ イチネン岩をも通す。

⑤ イチヨウ 16

- ① ヨウセツした天才。
- ② ヨウとして知れない行方。
- ③ 彼はボンヨウな人物だ。
- ④ イヨウな風体の人。
- ⑤ ヨウヘイ制度のある国。

第2問 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。

浩平と重子は大学時代の同級生である。お互い惹かれあうものがあつたが、別々の人と結婚した。二人は七十歳を越えている。それぞれ相手とは死別し、今は互いに独り身である。重子の息子が浩平の娘の夫と同僚だったことがわかり、それをきっかけに二人は再会する。浩平は重子との連絡用に携帯電話も買い、慣れないながらもメールを使い始めた。浩平はもう一度デートがしたかったが、重子が病気でなかなか会えなかった。病気が治って、ようやく待望の二度目のデートの日となった。

先日来の病気の経過から回復までを辿る彼女の口振りは以前と変わらず歯切れよかつたが、どこか一点、何かを引きずるような気配が孕まれてい
るのに浩平は気がついた。

彼の方は、葡萄の木を室内の鉢から庭の土に移した夕暮れに襲われた妙な心細さに触れるのを避け、携帯電話の入手からメールの打ち方の習得、とりわけ漢字への変換の難しさなどについて苦笑まじりに語つた。

「重子さんに薦められなければ、今でも携帯電話など持たなかつたらうな」

「私も貴方の若返りのお役に立っているわけね」

「ただ、あのメールという奴ね、少しおしゃべり過ぎて心配になる」

「声がない分だけ厚かましくなるんでしょう？」

「恥知らずになる。だから、あなたと娘のところくらいしかメールは送らないけれど、もし失礼なことがあつても許してね」

「本心ではないから？」

「いや、嘘をつくという意味ではなくてさ」

「本当のことを言い過ぎるのかしら」

「その危険の方が高いかな」

夕暮れに交換したメールの中で自分がどんな言葉を重子に送っていたかを危ぶみながら、浩平は呟くように答えた。

「大丈夫よ。貴方のメールは全部平仮名だもの、何を言つても遊んでいるみたいになる」

「てっぼううって、パンパンパンか」

「もひとつおまけに パンパンよ」

馬鹿なこと言つて、と着物の胸を叩いた重子が笑いを収めると、ふと改まった表情に変わつて背を立てた。短い間があつた。

「息子達がね、ロンドンに行くことになりました」

「^(ア) 伝えるのもただ知らせるのでもなく、自分が今それを決めた、とでもいうかのような強い語調だつた。そのことが重子とどう繋るのか咄嗟には判断がつかず、大きな波に似た動きが彼女を包み込もうとする光景だけが浩平の頭の奥をよぎつた。

「海外勤務になつて？」

「そう、少なくとも三年くらいは帰れない」

「家族連れで？」

近くにあつたものが一斉に遠ざかつて行くような心細さを覚えた浩平は小声で確かめた。

「おそらくね。私はそこに入らないけれど」

小さく首を横に振っている重子が何を考へているのかわからずに浩平は問い重ねた。

「一緒には行かない、ということ？」

「私は日本のお留守番」

今度は大きく首を上下させて頷いた重子が、先刻より強く着物の胸を叩いてその言葉を自分の身体に打ち込もうとするかのように彼には感じられた。

「今の家に残つて？」

「そうなればいいけれど、まだはつきりとはね……」

急に声が細くなつて言葉の先が危うげに揺れた。面倒をみなければならぬ老いた親などを抱えて暮らしている場合、会社は事情を考慮してその種の社員を海外勤務の対象から外すことがあると聞いたので、それが息子の出世の妨げとなることを恐れ、建て前として自分は横浜で一人暮しをする妹の元へ行くことに前から決めてあるのだ、と彼女は口速に言葉を継いだ。

「すると、妹さんのいる横浜に引越すわけ？」

「まだ決めていない。息子の足手纏いにならずに済んだだけで私は満足だから、後のことはこれから考える」

息子達が外国に転勤するなら、留守になる家を期限つきで借りたいという人もいるようだし、妹の考えも前とは少し違ふようだし、後のことはまだ何もかも流動的なのだと告げた後、思い切つて老人ホームを探すのもいいかと考へている、と^(イ)彼女はついでのようにつけ加えた。

「老人ホーム？」

さりげなく重子が口にした場所の名に浩平はたじろいだ。七十代も半ばに達しようとする年齢となれば、やや早めだとしてもそれを検討してみるのにさほど不思議はないのかもしれないが、重子がそこにひっそりとはいつて行く後ろ姿を思い浮かべると浩平は突き飛ばされたような衝撃を受けた。

「考え方の一つとしてね」

彼の反応を宥めるように重子は軽い口振りで答えた。

「今のおうちに残るとしたら、一人になる」

老人ホームという選択から重子を少しでも遠ざけようと浩平は言葉を挟んだ。

「気楽でいいかもしれないけど、先輩としてはいかが」

「もう馴れているからね。娘夫婦も遠くはない場所にいるし」

「おたくのオムコさんだって、いつか似たようなことになるかもしれないわ」

「そしたら、日本の留守番か」

「ね、^(エ)そんな気分になるでしょ？」

^(エ) 下から覗き込むように見つめてくる重子の視線が痛かった。同時に、潮が引いて砂浜が現れるかのように、急にあたりの景色が広々と眺められる気分も生まれていた。まだ濡れている砂の穏やかな斜面を甲羅の乾いた二匹の留守番蟹^{かた}がゆっくり横に歩いている――。

「^(オ) こういう話はメールでは送りにくいから」

言い訳する口調で重子がつけ加えた。

「メールでは応えようがない。おめでどうでもあるまいし、寂^{さび}しくなるねといってももつともらしいだけだしさ」

「誰が寂しくなるの？」

訊き返されて浩平は答えに詰まった。ただ寂しい空気が漂い出すのを強く感じただけという言葉だったが、相手の立場への斟酌^{しんしゃく}より自分の気持ちを訴えようとする衝動の方が激しかった。

「とりあえずの御挨拶は、おやすみなさい、くらいしか思い当たらない」

重子の質問には答えずに、窓辺の葡萄を庭に放った夕暮れ、彼女と交わしたメールの最後が「おやすみなさい」であったことを思い出しながら彼は言葉を返していた。妙に感傷的な気分浸って「くらがり」だの「だいじなもの」だのとメールで書き送っていた時、重子は既に息子の外地転勤

を前に身構えを巡らそうとしていたのかもしれないと考えると、自分の能天気さと間抜けさ加減が恥しかった。

重子本人が外国に去るわけではなく、会ったことも見たこともないその息子夫婦と子供達が日本を離れるだけなのに、彼女の暮らしの厚い殻がごそりと剥ぎ取られそうな心細さを覚えた。そして一方、横浜に住むという彼女の妹の家にも、まして冗談めかして口にした老人ホームなどにも身を寄せてもらいたくない、という思いは一層かたまっていた。

「もし本当に今の家に残るのだったら、息子さん達が日本に帰って来るまで、及ばずながらこの私が母君のお守り役を仰せつかります」

重子に目を据えてそう伝えると、ほとんど歳の変わらぬ彼女が急に自分の母親にでもなったような奇妙な感覚に包まれた。目の前に居るのは、世話を見てやると告げた相手でありながら、どこか甘えの許される奥行きを湛えた柔らかな存在だった。重子の見慣れぬ和服姿がその印象を一層強めているのかもしれない。

（黒井千次『高く手を振る日』による）

問1 傍線部(ア)「伝えるのもただ知らせるのでもなく、自分が今それを決めた、とでもいうかのような強い語調だった」とあるが、ここから読み取れる重子の

気持ちの説明として最も適当なものを、①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

17。

- ① 息子達がロンドンへ行くことはどうすることもできないが、決定権は自分にあるかのように虚勢を張ることで自らを慰めた。
- ② 息子達がロンドンへ行くことはずっと心にかかると悩んだが、浩平に余計な心配をかけたために本心を隠した。
- ③ 浩平に話すことで息子たちがロンドンへ行くことに伴う複雑な思いや迷いを断ち切り、事実を受け入れる覚悟を決めた。
- ④ 浩平に息子達がロンドンへ行くと言うことで、単なる友人からより親密な関係になりたいのだという意志を示した。
- ⑤ 息子達がロンドンへ行くことにさびしさを感じるものの、それ以上に子どもの将来に対して明るい希望を持っていることを伝えた。

問2 傍線部(イ)「彼女はついでのようにつけ加えた」とあるが、ここから読み取れる重子の気持ちの説明として最も適当なものを、①～⑤のうちから一つ選

べ。解答番号は 18。

- ① なるべく深刻な雰囲気にならないように気を遣った。
- ② さりげなく相手を驚かそうという悪戯心がわいた。
- ③ 気が置けない友人という関係に甘えようとした。
- ④ 自分の気持ちをわかってくれない相手を皮肉った。
- ⑤ 自分の言葉が与える影響をはかりかねていた。

問3 傍線部(ウ)「そんな気分」とあるが、その具体的な内容の説明として最も適当なものを、①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 19。

- ① 慣れない外国で生活しなければならぬ息子たちを、すぐそばで支えてやれないという焦燥感。
- ② はからずも自分が、グローバルな現代社会の犠牲者になってしまったという悲哀感。
- ③ 結局、足手纏いになるだけなので、息子たちによって日本に置き去りにされたのだという孤独感。
- ④ 息子たちと日本との繋がりを、自分がたった一人で守らなければならないという使命感。
- ⑤ 息子たちに二度と会えず、日本でひとり生涯を終えることになっても構わないという悲壮感。

問4 傍線部(エ)「下から覗き込むように見つめてくる重子の視線が痛かった」とあるが、その理由の説明として最も適当なものを、①～⑤のうちから一つ選

べ。解答番号は 20。

- ① 重子は自分を恋人ではなく、あくまでも友人と考えていることがわかったから。
- ② 何気なく振舞っているが、重子の心の奥底に深い悲しみがあることに気づいたから。
- ③ あわよくば恋人になってほしいという、自分の下心が見透かされているように感じたから。
- ④ 重子の気持ちに寄り添えなかったことを、問い詰められていると思ったから。
- ⑤ 自分の考えの甘さを突かれ、重子の決断に納得せざるを得なかったから。

問5 傍線部(オ)「こういう話」とあるが、その具体的な内容の説明として最も適当なものを、①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 21。

- ① 家族以外の人にはあまり伝えたくない個人のプライバシーに関する話。
- ② 知らされた相手もどのように返信していいか困惑する深刻な話。
- ③ 相手を深く傷つけてしまうことが予想できる衝撃的な内容の話。
- ④ お互いにとって人生の大きな分かれ目になるような重要な話。
- ⑤ 結論だけでなくそこに絡まる微妙な感情まで理解してもらいたい話。

問6 本文の構成や表現の特徴についての説明として最も適当なものを、①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 22。

- ① 何気ない会話の中から浮き彫りになる現代社会の矛盾を批判的に描いている。
- ② 比喩を用いながら会話の中での二人の感情の揺れを繊細に描いている。
- ③ 会話する二人のそれぞれの視点から家族の犠牲となる老人の悲劇を客観的に描いている。
- ④ おだやかな会話の底で大きく揺れ動くお互いの愛情を扇情的に描いている。
- ⑤ かみ合わない会話から浮かび上がる孤独な老人の姿を幻想的に描いている。

第3問 次の和歌を読んで、後の問い(問1～3)に答えよ。

- 1 [a] 霞かすみたてるやいづこみよしの吉野の山に雪は降りつつ
- 2 奥山にもみち踏みわけ鳴く鹿の声きく時ぞ [b] はかなしき
- 3 山里は [c] ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば
- 4 [d] の夜はまだよひながら明けぬるを雲のいづくに月やどるらむ
- 5 袖ひちてむすびし水のこほれるを [e] 立つけふの風やとくらむ
- 6 [f] が枝えに来あるうぐひす春かけて鳴けどもいまだ雪は降りつつ
- 7 [g] のなき世なりせばいかばかり人の言ことの葉はうれしからまし
- 8 高砂の尾上おのへの [h] 咲きにけり外山とやまの霞立たずもあらなむ

問1 空欄 a～e に入れるのに最も適当な季節を、次の①～④のうちから一つずつ選べ。

解答番号は a ㉓、b ㉔、c ㉕、d ㉖、e ㉗。

- ① 春
- ② 夏
- ③ 秋
- ④ 冬

問2 空欄 f～h に入れるのに最も適当な語句を、次の①～⑧のうちから一つずつ選べ。

解答番号は f ㉘、g ㉙、h ㉚。

- | | | | |
|--------|------|--------|--------|
| ① 桜 | ② 松 | ③ うたたね | ④ いっはり |
| ⑤ 逢ふこと | ⑥ 若菜 | ⑦ 錦 | ⑧ 梅 |

問3 掛詞を使ってある歌は、何番の歌か。次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は 31。

⑤ ①
5 1

⑥ ②
6 2

⑦ ③
7 3

⑧ ④
8 4